

データに、先生方の想いを乗せて

筑波大学人間系教授 藤田晃之さん

PART2「解説編」では、座談会を振り返りながら、筑波大学キャリア教育学研究室の藤田晃之教授を迎え、マクロデータのもつ意義と、それを実際の学校現場でどう活かすべきか伺いました。

**主観的な偏りを補正する。
それがデータが果たす最大の役割**

——座談会を振り返る前に伺います。

藤田先生は1993年の発行以来、『最新 教育データブック』（時事通信社）の改訂を重ねてきました。出版を通じて伝えたいことは何でしょうか？

よく言われるように、学校教育って誰もが通るため、個人的な体験を基に持論を語りがちじゃないですか。そこを数値として改めて見ることで、「つい、経験に基づいて語っていたけど、客観的にはこういう数値として表れるのか」といった気づきが得られるなど、教育を相対化する道具として捉えてほしいという思いがあります。例えば、報道で、「深刻化している」と騒がれているような事象も、データを見ると、それほどでもないことに気づくことがあります。感覚の偏りを補正する役割を果たすのがデータなんです。

ただし、座談会でも指摘があったよ

うに、データというのは、その統計を取ると決めた時点で意図的であるし、ある種の恣意性を伴うもの。さらに、平均値と中央値のどちらを取るかで見え方は違ってくるし、p値の置き方でも判断は変わってきます。しようと思えば、「誘導」できてしまうんです。

ただ、そうであっても、データのないう主観的な議論よりは生産的だし、何より共通の土台を提供してくれる。本日の座談会も、地域や学校の種別も多様な先生方にお集まりいただきましたが、データを介してお話しただいたことで、目線を合わせながら深い議論をすることができました

——座談会では「データだけでは生徒は動かない」という意見が出ました。

重要な指摘だと思いました。確かに、マクロデータだけでは、子どもの心は動きにくいでしょう。皆さん述べられていたように、大切なのはデータ自体ではなく、それをどう解釈するか。生徒の心を動かすのは、そのデー



**データだけで生徒は動かない。
大切なのは、誰が語るか、どう語るか**

タを誰が語っているか。どう読み解き、そこにどういう信念や愛情が込められているかだと思います。その意味で、今回編集部が紹介したデータをプリントアウトし、単に「見ておけ」と生徒に配るのではなく、「先生はこう感じた。君たちはどう思う？」と、ぜひ問いかけていただきたいです。

その際、必ずしも先生方が統計リテラシーを有している必要はありません。なんなら、先生によつて言うことが矛盾していても問題ない。むしろ矛盾があることで、「では、自分はどうか捉える？」と、考えざるを得なくなると思うのです。そしてこれは高校の先生だからできること。小学生では混乱を招いてしまうでしょう。

情報や数学の授業で統計を扱う場

**変容し続けるキャリアのあり方を
どう提示していくかが問われる**

——座談会で取り上げた具体的なデータについて藤田先生のお考えを伺います。エッセンシャルワーカーや理系人材の不足など、労働需給のミスマッチについてどう捉えていますか？

「良い仕事に対する6つの価値観クラスター」（13ページ図11）にもあるように、今の若者は自分軸を大事にし



筑波大学人間系教授
藤田晃之さん

ふじた・てるゆき ● 1993年、筑波大学大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。博士(教育学)。中央学院大学助教授、筑波大学教育学系助教授、デンマーク教育大学院客員研究員、筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授などを経て、2008年文部科学省入省。キャリア教育担当教科調査官を務める。2013年より現職。教育学域長、大学院教育学学位プログラム教授。

ています。過酷な労働環境が目に見えている業界に、いくら「人手が足りないから」と言ったところで、「なんで自分」となるのは当然でしょう。一方で、梅北先生が指摘したように、理工系志願者が増えないのは、社会がその面白さを示していないことに原因があるのかもしれませんが、その話を受けて菅野先生は、教員不足の昨今、生徒に向けて「教員楽しいぞキャンペーン」を張っているそうです。延沢先生も、「国語って面白い。国語の先生になりたい」と思わせるような授業を教諭時代から心掛けていたと話していました。

皆さんが危惧されていたような「社会がこうだから」という北風の押し付けではなく、生き生きと働く大人に接する機会を設ける太陽的なアプローチが有効なのだと思います。

——年内入試の増加というデータは、先生方、思うところが多いようでした。

年内入試の増加トレンドは、私立大学の生き残り策として減ることはないでしょう。ならば、石川先生が言うように戦略的に活用し、高校教育の充実に転化させていく知恵が必要です。例えば、年内入試を探究を充実させる動力源にするだけではなく、進学

後や社会に出たのちのキャリア形成に役立てる。梅北先生の調査からも、高校時代に何かをやり遂げた生徒は進学先で力を発揮するわけですから。

高大接続の観点から高校での探究に私の希望を言うとしたら、先行研究の分析にも力を入れてほしいです。高校生の着想は素晴らしいけれど、ほとんどは先人が積み重ねてきたことと重なります。「でも、ここを掘り下げたいので、私たちはこうしてみました」みたいになってくれると非常に頼もしく感じます。高度な話にも聞えますが、今やパソコン1つで世界中の先行研究にアクセスできるし、外国語の文献もAIが要約してくれる時代です。巨大な学問マップのどこに自分の探究が位置づいているのか検証する体験を積むことで、大学での学術研究にスムーズに接続すると思います。

——座談会の最後、教員のあるべき姿に話が発展しました。今後、進路指導はどう変わっていくのでしょうか？

多くのことがAIやオンラインで代替されるなか、生身の人間である教員が力を発揮するのは、それこそ「私はこう感じた。あなたはと思う？」と、生徒と向き合い、対話する場面だと思います。延沢先生が指摘されたように、先生方の負荷は上がりますが、専門職としての教員が本来やるべきこ

とに時間を割くわけです。その際、人間の価値としての水平性はあっても、積み上げてきた知見や経験は明らかに異なるため、各先生ならではのアドバイスはあつて然るべきだと思います。

高度経済成長期は直線的に社会が変容し、将来はある程度予測可能でした。けれど、VUCAの時代はそうはいきません。「将来、社会に貢献する」といったときの「将来」はものすごいスピードで変化し、しかも変容の規則性も見えません。となると、目の前のことを大切にすると同時に、生涯にわたつて変容し続けなければいけないキャリアのあり方をどう提示していくかも問われていると思います。

そして、そのとき土台になるのが、やはりデータなのだと思います。かつてのように、未来を予測するためにデータを使うことはもはや難しいかもしれません。けれど、例えば「なるほど。今は転職や副業が当たり前の社会なんだ。だから自分たちの世代は、生涯、変化に対応し続けたいといけないんだ」ということはデータから読み取れるわけです。キャリアチェンジを前提とした、先の見えない社会を、しなやかに生きていく。そうした適応力と創造力を育むことが、これからの進路指導に欠かせないと改めて感じる事ができた座談会でした。